

埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）		文化環境専攻		学籍番号	08CS002
氏名	岡田真依	ローマ字	OKADA Mai	国籍 (留学生)	
修士学位論文名	ミュージアムの解説行動における他者への配慮—相互行為分析の視点から				
提出年月日	2010年1月12日		指導教員	山崎敬一	
体裁 ()	81頁（1頁文字数1600字）		言語	日本語	
別冊添付資料等					
キーワード	配慮、相互行為、ミュージアム、エスノメソドロジー、会話分析				
<p>本研究の目的はミュージアムでの解説行動における配慮の行われ方を明らかにすることである。自己と他者の2人、あるいはそれ以上の人間が顔を合わせる（出会う）ときに生じるのが配慮である。配慮には、親密な仲にある者同士よりも距離を持った間柄のほうが、また参加者が一対一で向き合っている場面よりも参加者が複数人いる場面のほうがより多く用いられるといった特徴がある。ある一つの発言をするにしても、その発言を投げかける相手のことが良く分かっているなければ、その発言が相手に及ぼす影響の度合いが分かりかねるので、言葉を慎重に選ぶ必要がある。また、その発言を評価するものが1人の場合より、複数いる場合の方が評価をする者が増えるので、発言をする者とその言葉を投げかけられた者の体面を保つことが困難になる。</p> <p>本研究では、他者への配慮がある程度明示的に行われている様子を研究するために、ミュージアムという公共の場所をフィールドとして、そこで行われているギャラリー・トークを分析した。ミュージアムにおける解説は一般的に解説者とはほとんど面識のない複数人の観客を相手に行うものである。また、その解説はトークへの参加者だけでなく、その周りを行きかう他の客にも開かれている。ゆえに、ミュージアムにおける解説行動は、一般的な会話に比べ配慮が頻繁に行われているものと考えられる。本研究では、特に、解説における質問場面に焦点を絞って分析を試みた。質問場面は、相手との相互行為が明示的に表れる場面であると同時に、質問そのものが相手を試すこと、場合によっては脅威にもなりうる場面でもあるため、話し手と受け手の双方の動作の中で配慮がより明示的になされていると考えたからである。また、本研究では、質問場面における会話を分析するだけでなく、話し手と受け手の視線配分の用いられ方にも焦点を当てる。会話に見られる配慮は、一般的に意識的に行われるものである。一方、視線を配るという動作は、意識的に行うものではなく、無意識的に行われることが多い。特に、配慮を表す行為の手段として、意識的に視線配布を用いようとはあまりしない。配慮に関しての従来の研究は、言語レベルでの研究が主であった。本研究では、視線というジェスチャーも研究の対象とすることにより、より広い視野での配慮の研究を試みる。分析を行う上での方法論として、量的分析ではなく質的分析を中心的な議論として扱う。質的分析のうち、言語レベルでの分析には会話分析を、身体レベルの分析にはエスノメソドロジーによる相互行為分析を用いて議論することとする。</p>					